

古典派の音楽を代表するのは、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンという3人の作曲家の関係

ハイドン(F. J. Haydn, 1732-1809)は1750年代に作曲活動を始め、その生涯は19世紀の初めまで続きました。

モーツァルト(W. A. Mozart, 1756-91)は、神童の誉れ高く、一桁の年齢、つまり1760年代から作品を書き始めたものの、その生涯は短く、1791年に35歳の生涯を閉じています。

ベートーヴェン(L. v. Beethoven, 1770-1827)は、その2人よりやや生年が遅く、19世紀の最初の四半世紀までその生涯を伸ばしますが、彼の没年時代には、すでにロマン主義の音楽が華やかに開始されていました。

しかし、この古典派の開幕に先立ち、バロックから古典派への過渡的な時期が存在します。その動きの中に、古典主義音楽の萌芽も見られるところから、その時期を前古典主義の時代と呼ぶことがあります。時代的には1740～80年頃のことです。

バロック時代は、社会的には絶対主義時代に重なりますが、18世紀末にはフランス革命がおこって、社会体制はもちろんのこと、人間の思想にも大きな変化をもたらしました。その変革を指導し、推進したのが、啓蒙思想でした。

絶対主義体制下にあった人々も、科学の発達や思想の変化にしたがって、絶対主義に対して疑問を持ち始めていました。彼らは神や神への信仰の代りに、心のよりどころを人間の理想に求めようとしたのです。カントが「なんじ自身の悟性を使用する勇氣を持つて」と表明した言葉にも、それがよく表されています。この考え方がつまりは啓蒙思想であり、18世紀の後半において思想界の中心的な考え方となっていくのです。

啓蒙主義はことにフランスで発達し、モンテスキュー(C. Montesquieu, 1689-1755)、ヴォルテール(Voltaire, 1694-1778)、ルソー(J. J. Rousseau, 1712-78)などが輩出します。そして、それをさらに推進したのが、この3人を含む百科全書派とよばれるグループです。彼らは哲学者の デイドロ(D. Diderot, 1713-84)を中心に、20年余もかけて、近代哲学や自然科学の知識を盛り込んだ百科全書を編纂して、彼らの思想を強く訴え、それが後のフランス革命を準備する役割を果たすのです。

しかし、だからといって、急に社会体制が変化したというわけではなく、音楽家の地位は依然として低く、宮廷ないしは教会に仕える一奉公人という立場に変わりはありませんでした。当時の音楽家が宮廷楽長ないしは教会の合唱長という地位を欲しがったのも、それによって地位が安定し、収入を確保することができたからです。

ハイドンが30年近くも務めたエステルハージ家の宮廷楽長という地位も、優遇はされていましたが、本質的には、その身分に変わりはありませんでした。

モーツァルトが、後年ウィーンで独立せざるをえなかったのも、そうした安定した地位を得ようとして得られなかった結果の、余儀ない生活形態だったのです。

ベートーヴェンやシューベルトの時代、つまり19世紀の最初の四半世紀時代になると、近代的な意味での自立する音楽家の姿を認めることができるようになります。それこそ、ロマン派時代の音楽家の姿といえるでしょう。

フランツ・ヨーゼフ・ハイドンは1732年3月31日、オーストリアのローラウという村で生まれました。父マティアスは車大工で、母マリアは料理女という家で、第二子(長男)として、愛称はゼツパールと呼ばれていた。一日の仕事が終わると、ハイドン一家は集まって父マティアス自慢のハーブを奏でながら、民謡などを合唱するのが習慣だったという。ハイドン家の子供のなかでもヨーゼフ・ハイドン(ゼツパール)の歌は際立っており、たまたま訪れた親族がハイドンの歌の才能に目を付けたことから、ハイドンの音楽人生は始まっていくのだった。

その楽才は、カルル・ゲオルク・ロイターによって見いだされ、ウィーンのステファン 寺院の合唱童児となるのである。当時はカストラートという少年時の声を保つために去勢された男性歌手がおり、ヨーゼフ・ハイドンもこのカストラートになる話があったのだが、父の反対もあり、手術せずに済んだようだ。そのため、その後声変わりをしたハイドンは、少年合唱団に在ることができなくなり、ちょっとした失態から解雇されてしまう。

ヨーゼフ・ハイドンの幼少時は、必ずしも順風満帆とは言えず、音楽家の家計でもなく、裕福でもない家系から、自分の声と楽才と運を頼りに人生を歩んでいったのだった。あてもないなかウィーンでその日暮らしの宿から探さなくてはいけなかったハイドンは、ミハエル教会の聖歌隊だったシュパングラ―とたまたま出会ったことから、ちょっとした知り合い程度のシュパングラ―から宿の提供を受ける幸運に恵まれ、半年の間シュパングラ―

家の屋根裏に寝泊まりすることになったのである。そんなハイドンは、作曲や演奏家をしながらなんとか生計を立て、独立することを夢見ていた。

小さい頃から苦勞して身を立てようと努力してきたハイドンだが、その時代のハイドンを表す一つのエピソード

ハイドンは自分の楽しみのために三重奏のセレナータを作曲し、二人の仲間といっしょに演奏しながら、夏の宵のウィーンの巷を流してあるいた。そのころクルツニベルナルドンという人物が[ウィーンに]住んでいた。この人は面白い即興の機知で評判の喜劇役者で、舞台上でアルレッキーノ役を演じていたところから、ハンスヴェルストという渾名がついていた。われらが夜の冒険者たちは、そっとベルナルドーネの窓辺に近寄ってセレナータを奏でた。彼は美しい妻を持っていたのである。音楽の新鮮さと優雅さがベルナルドーネの心を打ったので、路までおりてきて、誰の曲か、とたずねた。「私のです」とハイドンが答えた。「ブラヴォー！オペラを一曲作らないか？ 上ってきなさい」ハイドンは彼についていった。そして《びっこ[せむし]の悪魔》という台本をもってそこからおりてきた。音楽はさっそく作曲され、結果はもっとも満足すべき成功であった。劇場のための最初のこの作品を作曲したのは、ハイドンが一九歳のときであった。

ハイドン 19 歳の時、最初のオペラを作曲したと言われている。バッハやモーツァルトのような音楽家の家系とは違い、何もない中から叩き上げて音楽家としての地位を一步步築いていったのである。その後、着実に地位を築き、エステルハージ家の副楽長、そして楽長を拝命するハイドンは、雇われの身として仕えながら、指揮者として、作曲家として、そして楽団の管理者として多忙な毎日を送ることになる。

では、ヨーゼフ・ハイドンは楽団員からはどのように見えていたのだろうか？

ハイドンの人柄が表れたエピソード

ハイドンの厳格さは、演奏についてのことに限られていた。輩下の楽団員に対しては、穏和な楽長であった。彼の「子供たち」の誰かが失策を犯しても、こと芸術に関する問題でなければ、被告のためにハイドンが侯爵の前に伺候して、最大限の弁護をおこなうのが常であった。なにごとについてもハイドンは争わなかった、と伝えられている。それにもかかわらず、いつでも自分の要求を貫くことができた。楽長に対する楽団員たちの信頼と敬愛は、「パパ・ハイドン」という呼びかたによくあらわされている。

ハイドンの日課と好きな食べ物

ここで、ハイドンの日々の日課について

夏には、彼は六時半に起きて、まず、髭を剃った。七十三歳のときまでは、自分で剃っていたのである。それから身仕度をととのえた。生徒がきているときには、先生が着物を着るあいだに、彼はピアノを弾いて、ハイドン氏のレッスンを受けねばならなかった。誤りはすべて、即座に訂正され、それから新しい課題が与えられた。これが一時間半かかった。八時きっかりには朝食がテーブルに整えられていなければならなかった。朝食後すぐに、ハイドンはピアノに向かい、即興演奏をしたり、なにかの作品のスケッチをする。八時から十一時までの時間は、こんなふうにして過ごされた。十一時半、訪問をうけたり、ハイドンのほうから訪問したり、あるいは一時半まで散歩に出かけたりした。二時から三時までは正餐の時間であった。そのあとひきつづいて、家でなにかちょっとした仕事をしたり、作曲を始めるのだった。

彼は、朝のスケッチを総譜に仕上げ、これに三、四時間かける。午後八時、ハイドンはたいてい外出し、九時に帰宅し、総譜を書いたり、あるいは、書物をとり出して十時まで読んだ。この時間に彼はパンとぶどう酒の夕食をとる。原則としてハイドンは、夜にはパンとぶどう酒以外は食べなかった。これが破られるのは、晚餐に招かれたりするようないろいろな機会に限られていた。彼は食事のときに、陽気に話したり、愉快に騒ぐのが好きだっ

た。十一時半に床に就くのだが、年老いてからはもっと遅くさえた。冬になっても、半時間遅く起きるということ以外は、この日課に変わりはなかった。

ハイドンという人は、叩き上げの音楽家であり、努力の人であり、日々の規則正しい生活の中に作曲の創造性を発揮した人であった。そして決まっていたら、

夕食にはパンと葡萄酒をとっていたのだ。食事だけをみても、ストイックさが伺い知れるだろう。すこしハイドンの一日をまとめてみると、

<ヨーゼフ・ハイドンの一日>

6:30 起床 髭剃り 生徒にレッスン

8:00 朝食

即興演奏・作曲スケッチ

11:00 訪問もしくは散歩

14:00 正餐(食事)

15:00 作曲スケッチを総譜に仕上げる。作曲活動

20:00 外出

21:00 帰宅、総譜仕上げ、読書

夕食(パンと葡萄酒)

23:30 就寝

ハイドンは、毎日の日課で決まりきったルーチンをこなしながら、余計な余興を排除して作曲活動に集中する生活スタイルを確立していた。

叩き上げで努力家であり、几帳面さが伺えるハイドンは、このようにして音楽における厳格さと、「パパ・ハイドン」として慕われる人格を磨いていたのである。

ハイドンとモーツァルトの関係

ハイドンがモーツァルトと交流を持つようになったのは、1780年代のはじめごろだったと言われている。ハイドンとモーツァルトは、お互いに性格が違うからこそ、自分にはないものを見出し、互いに惹かれ合い、刺激を受け、尊敬し合う関係に発展していったのだろう。

この二人の偉人ほど根本的に性格の違う二人の人間を想像することはむずかしい。

モーツァルトは驚くほど速く発展していった。いっぽう、ハイドンの進歩は信じられないほどおそかった。事実ハイドンは、三十六歳(モーツァルトはこの年に死んだ)のときには、まだほとんど重要な作品を書いていなかった。

ハイドンは、モーツァルトがなくなった36歳の時には、まだほとんど重要作品を書いていなかった。早熟の天才と遅咲きの花が互いに認め合っていたのだ。人間としてモーツァルトは典型的な芸術家で、その気分は、快活な陽気さから深い憂鬱へと、また怒りの発作からほとんど女性的な優しさへと、すばやく変化した。ハイドンのほうはおそらく冷静な気分の持ち主で、つねに静穏、快活、多分にユーモアの感覚をもっていた。モーツァルトは生まれながらにして劇的な作曲家であり、またピアノとヴァイオリンのいずれにおいても輝かしい名手であった。したがって彼は、演奏家として驚くべき成功をかちえたのである。舞台音楽の作曲家としてのハイドンの才能は限定されていた。彼は自作品をハープシコードから目立たぬように指揮するのが好きだったし、独奏家としての月桂冠をかちえようなどという野心はまったく持ち合わせていなかった。

人間としての性格では、

モーツァルトが典型的な芸術家気質である一方で、ハイドンは冷静な気分の持ち主、モ

ーツァルトが常に目出つ劇的な作曲家であったが、ハイドンは自分自身は目立たず指揮するのが好きだったという二人であった。

モーツァルトの生活には、秩序や規則正しさについての感覚が欠けており、金銭の価値についても理解しなかった。ハイドンは生涯の大半を一種の機械的な正確さで送った。整然たる規則正しさは、彼にとって不可欠のものであった。経済的なことならに関してモーツァルトが無一文で死んだのに反して、ハイドンは死後にながりの財産をのこした。

モーツァルトは金銭面や生活面においては、成人まで親の庇護下にあったためか、金銭的には浪費家であり、秩序や規則正しさの感覚に欠け、典型的芸術家タイプであった。

ハイドンは、生涯の大半を整然たる規則正しさで送り、経済的にも若い頃から独立のために苦勞したためか、出版商に引けを取らないくらいしっかり者であった。

この二人の天才がたがいに惹かれたのは、こうした性格の相違によるものだったにちがいない。もし彼らがいつもいっしょに住んでいたならば、たがいにやりきれなくなっただろうが、あまり頻繁に会うこともなかったため、一回一回の法門がひとつの重要なできごととなった。ハイドンはモーツァルトの変わりやすい気質にひかれていたし、モーツァルトはハイドンの安定した温かい感情に安らぎをおぼえたのであった。

この性格も生活スタイルも経済的側面も全く違う二人は、普通なら全く合わない、かみ合わない二人なのかもしれないが、音楽という共通項によってたがいに強く惹かれ合い、一回一回の出会いが人生の中で二人に強烈な印象を与えたに違いない。お互いが自分にはない素晴らしさを相手に見出して、尊敬しあっていたのだろう。

ハイドンに師事したベートーヴェン

ハイドンはまた、ベートーヴェンとも深い縁のある人であった。

七月初旬、一年半のロンドン滞在を終えたハイドンがウィーンへの帰国途上ボンに立ち寄り、宮廷楽団員たちによる盛大な歓迎会が開かれた。この場で若い楽師ベートーヴェンが正式に紹介され、これまでに作曲したオーケストラ作品をハイドンに見てもらうことになった。それは《皇帝ヨーゼフの死を悼むカンタータ》と《皇帝レオポルトの即位を祝うカンタータ》の二曲、あるいはどちらか一曲であったろう。このときハイドン

はベートーヴェンの才能と大きな成長の可能性を見抜き、選帝侯にウィーンへの留学を進言する。巨匠ハイドンの推挙もあって、二十二歳を目前にしたベートーヴェンはボンの宮廷楽師として一年間の有給休暇を許され、ウィーンのアイドンの許に留学することになった。ボンの宮廷楽団による歓迎会のおり

ベートーヴェンがハイドンに紹介され、この時ハイドンはベートーヴェンの才能を見抜き、ウィーンへの留学を進言したと言われている。ベートーヴェンが22歳の時、その願いが叶い、晴れてハイドンの弟子として1年間のウィーン留学を許されるのである。

教育者パパ・ハイドンの功績

思うにフランツ・ヨーゼフ・ハイドンという人は、その存在によってモーツァルトに大きな影響を与え、その才能をも伸ばし、励ましていた親友のごとき間柄でありながら、若きベートーヴェンの師匠となり、ベートーヴェンを導いた教育者としての功績が偉大であろう。

燦然たる光を放つ二人の天才音楽家を見守り、導いたその存在感は、「パパ・ハイドン」という愛称に相応しい。

もし、ハイドンがいなければ、フランス軍占領下の五月三十一日、ハイドンが七十七歳で生涯を閉じる。ハイドンは前年三月二十七日のウィーン大学での演奏会で市民の前に顔を見せたのが最後となり、その後一年余は自邸で静かな生活を送っていたのだが、次第に体力が衰え、四か月ほど前には五十項目からなる「遺言書」が作成されていた。自分の体力の限界を覚った巨匠は遺言書に「わが遺骸はローマ・カトリックの第一

級の儀式に則って大地に葬られんことを」と記している。ハイドン逝去の報は数日中にウィーン全市民の知る所となり、六月十五日にショッテン教会で市民による追悼会が行われた。戦争こそ収まっていたとはいえ、フランス軍駐留の中での追悼式には疎開せずにウィーンに残留していた名士や芸術家のほとんどが出席し、フランス軍士官や一般兵士も参列して、ハイドンが最も愛し高く評価した。作曲家モーツァルトの《レクイエム》が演奏された。記録はないが、ベートーヴェンも当然列席していただろう。

ハイドンがなくなった際、追悼会ではモーツァルトのレクイエムが演奏された。ハイドンはローマ・カトリックの信仰にも篤く、晩年には英国で聴いた

ヘンデルの〈メサイヤ〉に影響を受け、オラトリオ〈天地創造〉と〈四季〉の二曲の有名な宗教曲を作曲した。〈天地創造〉は、ハイドンがイギリスから持ち帰った英語の台本をドイツ語に翻訳・編作して作ったもので、旧約聖書に書かれた天地創造の6日間を3人の天使が歌うというものである。